

「寄り添うとは、特別な訓練や技術によって相手の気持ちを受け止めることではありません。そばにいて一緒に考えることです」
身近な人の死や不治の病に直面する人たちを支える「臨床宗教師」。東北大学院が平成24年度から行っている養成研修を、龍谷大学院でも本年度から始めることになり、研修主任を

—きょうと—



任された。

東北大学院のカリキュラムでは、研修生が東日本大震災の仮設住宅を訪問している。被災者の話を聞く傾聴活動だ。後日、実際に交わした会話を文章にし、他の研修生たちに役割を割り振って再現してもらう。客観的に会話を振り返ることで、学べることがある。相手の言葉を聞き逃し

龍谷大文学部教授

鍋島直樹さん(55)

=神戸市中央区

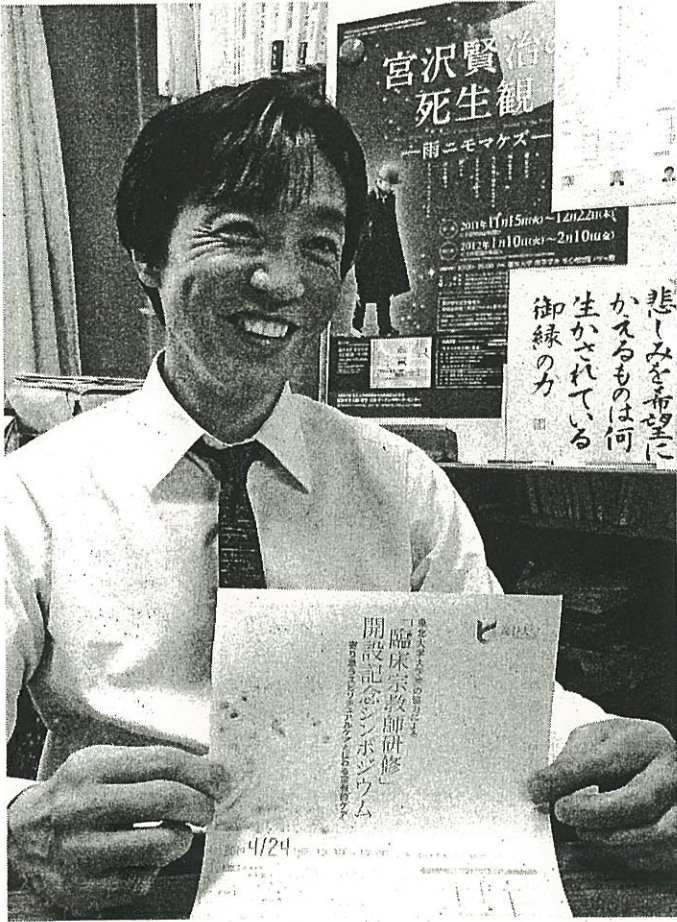
ていなかったか。すぐに答えを与えていなかったか。「自分の限界や至らなさを知り、謙虚になることが大切」という。
昨年10〜12月、一連の研修にオブザーバー参加し、同じカリキュラムの導入を決めた。通算21回に及ぶ被災地への訪問で、感じてきたことがあるからだ。
震災から28日後の23年4

月8日。浄土真宗の僧侶と合う人には、手を合わせるという宗教儀礼が必要なのだと痛感した。
7年の阪神大震災では、神戸市内の自坊が半壊し、自分のために友人たちが駆けつけてくれた。研究対象の宮沢賢治は「雨ニモマケズ」の中で、病氣の子供や母がいる場所へ「行くこと」を強調し、行動することの大切さを伝えて

いた。
「今度は自分が行く番だった。何もできなくても、待っている人のもとへ行き、ただそこにいるだけでいいと思った」
防災行政無線で避難を呼びかけ続け、津波の犠牲になった宮城県南三陸町の町職員、遠藤未希さんの両親にも出会った。ほかにも交流を続ける遺族は多く、臨床宗教師の役目を自ら実践しているといえる。

亡くなった人は、心の中で生きている。どんなにつらい別れでも、かけがえない思いは胸に刻まれる。死という暗闇を見つめ、心の奥底にある悲しみから生きる力を引き出せるのは、宗教者しかない。
伝道や布教という従来の宗教活動ではなく、専門教育の場で、いかに臨床宗教師の取り組みを広めていくかが今後の課題だ。目標は「被災地だけでなく、病院や福祉施設にも臨床宗教師が必要だと知ってもらうこと」だという。

臨床宗教師 自らも実践



悲しみを希望にかえるものは何生かされている御縁の力

なべしま・なおき

昭和34年、神戸市中央区生まれ。61年、龍谷大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は真宗学。浄土真宗本願寺派の僧侶でもある。著書に「死別の悲しみと生きる」(本願寺出版社)など。24日午後1時半から、龍谷大大宮学舎で開かれる「臨床宗教師研修」開設記念シンポジウムで登壇する。問い合わせは龍谷大文学部(☎075・343・3317)。

(小野木康雄)